

# 平成19年度重点プロジェクト事業（海外派遣研究員等旅費）報告 「リオデジャネイロにおける第5回国際柔道シンポジウムおよび 2007年世界柔道選手権大会」に参加して

中村 勇\*

## I. はじめに

平成19年9月11日から17日までの日程でブラジル国・リオデジャネイロ市で開催された第5回国際柔道シンポジウム (The 5<sup>th</sup> International Judo Federation World Judo Research Symposium) および第25回世界柔道選手権大会 (25th World Judo Championships) に参加した。参加の目的は (1) 国際柔道シンポジウムにおけるポスター発表を行い、海外柔道研究者との情報交換を行うこと、

(2) 世界柔道選手権大会における国際柔道の動向を調査することにあつた。

本派遣は鹿屋体育大学平成19年度重点プロジェクト事業（海外派遣研究員等旅費）として実施された。

## II. 現地活動報告

### 1. 移動および現地到着（9月11日）

出国から帰国までの日程は表1に示した。

表1. 派遣日程

月 日	予 定	日 程
9月10日	移動日	移動日：成田発アトランタ乗り継ぎ リオデジャネイロへ
9月11日	到着日	リオデジャネイロ着
		貸し切りバスで日本選手団練習会場へ移動 会場内で昼食後、ホテルへ移動
9月12日	国際柔道シンポジウム	終日、シンポジウム
9月13日	世界柔道選手権大会1日目 男子：100超，100以下 女子：78超，78以下	9:00 ホテル出発
		12:00 試合開始
		22:30 表彰式
		0:30 ホテル到着
9月14日	世界柔道選手権大会2日目 男子：90以下，81以下 女子：70以下，63以下	9:00 ホテル出発
		10:00 試合開始
		23:00 表彰式
		1:00 ホテル到着
9月15日	世界柔道選手権大会3日目 男子：73以下，66以下 女子：57以下，52以下	10:00 ホテル出発
		11:00 試合開始
		23:00 表彰式
		0:30 ホテル到着
9月16日	世界柔道選手権大会4日目 男子：60以下，無差別 女子：48以下，無差別	10:00 ホテル出発
		11:00 試合開始
		22:30 表彰式
		0:30 ホテル到着
9月17日	午前 自由時間	
	午後 移動	22:55 リオ発 アトランタ行き
9月18日	移動日	アトランタ乗り継ぎ 成田行き
9月19日	移動日	成田到着，羽田発，鹿屋着

\*鹿屋体育大学伝統武道・スポーツ文化系

現地ではまず日本選手団の練習会場に直行し、大会直前の調整練習を視察した。練習会場は地元のスポートクラブを借り上げ、サンパウロ市の柔道クラブから運んできた畳を敷いていた<sup>5)</sup>。場所は高級住宅街の中、厳重なゲートと壁で守られたところにあった。関係者や取材陣が取り囲む中、男女代表選手16名とその練習相手となる支援団、また監督、コーチ、サポートスタッフら約100名が大会へ向けて集中度の高い調整を行っていた。

## 2. 国際柔道シンポジウム（9月12日）

1999年バーミンガム世界選手権大会のときに初めて開催されて以来、2年に1回の世界選手権大会開催ごとに開かれ今回で第5回を数える同シンポジウムは国際柔道連盟（以降IJF）総会（前日の11日開催）と同じ会議場を利用して行われた。大会スケジュールは表2に示したが、6点の口頭発表、51点のポスター発表が行われた。筆者は Contest analysis of World Judo Championships in

1995-2005と題した研究をポスター発表した。なお抄録は資料として添付した。2003年大阪世界選手権大会の際に2001年世界選手権大会まで同大会の分析を報告したが、その後の2005年カイロ世界選手権大会のデータを追加して再分析して報告した。

今回のシンポジウムでは特別に参加者全員による会議が開かれ、世界中の柔道研究者達を束ねる組織、国際柔道研究者会 (International Association



写真1. シンポジウムの様子

表2. The 5<sup>th</sup> World Judo Research Symposium プログラム

時間	イベント	司会者	発表者
09:00-09:15	開会式	David Matsumoto	
	口頭発表	Michael Callan	Oral presentation presenters
09:15-09:30	Mediadores Psicologicos y Motivacion Deportiva en Judocas Espanoles		Vicente Carratala Deval
09:30-09:45	Consequences of cutting weight on indices of bone metabolic health in elite female judoists		Carl DeCree
09:45-10:00	Effects of recreational and competitive judo kata practice on cardio-respiratory health as evaluated by a portable gas analyzer system. A pilot study		Carl DeCree
10:00-10:15	Blue Judogis may Bias Competition Outcomes		David Matsumoto
10:15-10:30	Brain plasticity: effects of judo practice on gray matter volume		Wantuir Francisco Siqueira Jacini
10:30-10:45	Study on Mechanism of Injury Generation and Reduction Therapy based on Judo Forms called as Kata		Takashi Watanabe
10:45-11:00	休憩		
11:00-12:00	International Association of Judo Researchers 会議	David Matsumoto	
12:00-14:00	ポスター発表	Emerson Franchini	Poster Presentation Presenters

#### Contest Analysis of World Judo Championships in 1995-2005

Isamu NAKAMURA, Ryozo NAKAMURA, Hatsuyuki HAMADA, Michito SAKAMOTO

International Judo Federation (IJF) has been promoting judo to be more dynamic and aggressive in competition for over 10 years. A series of rule changes/modification such as enforced penalties against negative judo in late 90's and introduction of golden score in 2003 required athletes to be more physically fit and attack continuously. In addition, one minute addition to women's contest time period in 2003 set a higher standard for woman judokas than before.

The purpose of this study was to clarify how athletes' performance in competition has been changed since 1995 by analyzing scoring and winning points, means of scoring points and penalties in the World Judo Championships (WCs). IJF official results including 4750 contests of the 6 WCs were used in this study.

Some of the major findings were (1) ratio of ippon has been increased from 51.4% in 1995 to 59.6% in 2003, but decreased to 57.1% in 2005, (2) ratio of kinsa/golden score reduced significantly from 5.7% in 2001 to 2.9% in 2003 and 2.1% in 2005, (3) ratio of ippon for women was raised significantly from 50.2% in 2001 to 58.1% in 2003, when that for men was at the highest in 2001(65.0%) but 56.8% in 2005.

The results indicate world judo has become more dynamic by means of increased ippons and declining tendency of kinsa/GS. Although there was a clear distinction between men and women until 2003, sexual difference in competition performance became smaller when difference in time period was disappeared in 2003.

#### 資料 ポスター発表抄録

of Judo Researchers :IAJR) の設立が決定された。会長に英国 University of Bath の Michael CALLAN 氏が選出され、筆者を含め約80人が創設メンバーとして登録した。

CALLAN 氏を始め旧知の研究者や指導者らと研究情報の交換を行い、交流を深めることができ非常に刺激になった。特に今回は南米での開催ということで十分な参加人数が得られないのではないかと懸念されたが、ポスターもこれまでで最多数が展示されるなど国際的な柔道研究の高まりを感じさせた。

#### 3. 世界柔道選手権大会（9月13～16日）

隔年開催の世界柔道選手権大会は4日間の日程で実施された。バスで40分程度のところにある Arena Olimpica が会場となっていた。ここは1年前に開催されたパンアメリカン大会の際に新築された15,000人収容の体育館であった。初日は11時開始ということで金属探知機があるセキュリティーエリアを通過し会場入りするとさっそくスタートが1時間遅れるという情報はいはいる。理由は選手から預かってゼッケンを縫いつけた試合用柔道衣が試合当日になってもほとんどの選手の手元に返却されていなかったということだ。これは前回のカイロ世界選手権大会時とまったく同じ問題であった。一事が万事で大会運営に関しては他にも不具合はあったものの試合の方は順調に進行してい



写真2. 世界選手権大会試合の様子  
(内は黄色、外は青いマット)

た。

試合内容については大会初日に井上康生(100kg超)と鈴木桂治(100kg)が返し技で相次いで敗れる波乱があったことも影響し、日本選手にとって非常に苦しい戦いであった。

2004年アテネオリンピックで男女合わせて8個の金メダルを手にして以降、海外選手の徹底したマークに苦しんできたが、この大会でも3日間優勝者が出ず、最終日によろやく3人の優勝者を出すことができた。

初日の返し技のポイントは近年よくみられる技であり、こういったケースは国内では「死に体」の解釈と技の効果の優劣を判断するのに対し、国際大会では技の効果より最後に掛けた方の技を採る審判傾向にある。柔道の本質としての是非はともかく、十分対策を講じてきたはずのベテラン選手が相次いで敗れた問題を早急に修正しなければならないであろう。

この他審判員があまり罰則を与えず試合をそのまま継続させる傾向がこの大会でも見られた。そのため冗長な試合やレスリングまがいの偽装攻撃が目立ち、アテネオリンピックのころまでの特徴であったダイナミック柔道(選手の積極的攻防による激しい動きがみられるスタイル)が陰を潜めた感がある<sup>3)</sup>。

#### 4. 現地(リオデジャネイロ)の状況について

出発の半年ほど前から現地の治安については不

安視されていて、実際、外務省ホームページでも危険情報を出して渡航者の注意を喚起していた。

当地では世界最大級の貧民街といわれるファベラ（スラム街）が市内あちこちの丘の上に点在しており、夜間の単独での外出は避けるように注意された。日本チームの練習会場も厳重なセキュリティが施されており、我々関係者もIDが準備され、マスコミ関係者に至っては場所が特定できる写真や情報は報道しないことという誓約なしには取材許可がでなかった<sup>2)</sup>。我々のバスも毎日試合後はファベラ住民による襲撃を恐れて、赤信号を突破して猛スピードでホテルに直行するという状況であった。実際は何も問題は発生しなかったが、華やかな観光都市の裏側を感じ取ることができた。

### Ⅲ. 総評

今回の世界選手権では参加国が史上最多の参加人数（748名）と国数（138カ国）と大幅に増加した<sup>1)</sup>。また柔道研究の分野でもシンポジウムに世界中から数多くの研究発表が集まり、またIAJRという新しい研究者組織が立ち上がるまでになった。

今回の派遣で改めて柔道の国際的な浸透度の高さを感じることができた。競技としてだけでなく、学術的、かつ政治的にも成熟してきている点は歓迎すべきであろうが、その中心的位置に立つべき日本の勢いのなさが気になる。柔道の武道性を説くことができる日本としてなすべきことは多いと感じた。

#### 参考文献

- (1) 射手矢岬, 中村勇. (2007). 世界柔道選手権. 柔道 78(11): 6 - 35.
- (2) 桐生邦雄. (2007). つれづれ日記リオデジャネイロ世界選手権編. 近代柔道 341: 58 - 61.
- (3) 中村勇. (2007). データで読むリオデジャネイロ世界選手権前編. 近代柔道 341: 48 - 51.

- (4) 山口香編, 木村昌彦, 向井幹博, 中村勇, 持田治也. (2007) 中学生と指導者のための武道・体育シリーズ2 柔道で磨く“心技体”. ベースボールマガジン: 東京, pp.6 - 8.
- (5) 吉村和郎. (2007). 大会総評. 柔道 78(11): 36 - 37.